

第5巻「統語論」演習問題の解答と解説

2013.05.02

●第1章

1.

【問題】 Jackendoff (1972)は、θ役の間に(1)のような主題階層(thematic hierarchy)があり、それに基づく(2)の条件により受動文の文法性が決定されると主張している。

- (1) 1. 動作主
- 2. 場所、起点、着点
- 3. 主題（被動者を含む）
- (2) 受動文の by 句は主題階層において、受動文の主語よりも高い位置になければならない。

以下の能動文における主語と目的語の θ役を述べ、対応する受動文の文法性が(2)により説明されるのか、あるいは(2)にとって問題となるのかを考えなさい。

- (3) a. The doctor examined John.
- b. John was examined by the doctor.
- (4) a. The car costs thirty thousand dollars.
- b. *Thirty thousand dollars are cost by the car.
- (5) a. The house has five rooms. (cf. There are five rooms in the house.)
- b. *Five rooms are had by the house.

【解答】 (3a)の能動文では、主語 the doctor が動作主、目的語 John が被動者（主題）の θ役を持つ。したがって、(3b)の受動文では、by句が動作主、主語が被動者（主題）となり、(1)の主題階層において by句の方が高い位置にあるので、(2)の条件を満たし文法的となる。

(4a)の能動文では、主語 the car は主題、目的語 thirty thousand dollars は場所の θ役を持つ。したがって、(4b)の受動文では、by句が主題、主語が場所となり、(1)の主題階層において by句の方が低い位置にあるので、(2)の条件に違反し非文法的となる。

Jackendoff (1972)によれば、cost や weigh のような度量を表す動詞の目的語は、価格や重量などの尺度における場所を表し、主語はその場所に存在する主題である。度量表現が場所の θ役を持つことは、それが場所の前置詞 at により導かれることから支持される。

- (i) a. The champ weighed in at 654 pounds.
- b. I wouldn't buy oranges at 25 cents each. (Jackendoff 1972: 44)

(5a)の能動文では、主語 the house は場所、目的語 five rooms は主題の θ役を持つ。（この文はカッコ内のように書き換えられ、明らかに the house は five rooms が存在する場所を表す。）したがって、(5b)の受動文では、by句が場所、主語が主題となり、(1)の主題階層において by句の方が高い位置にあるので、(2)の条件を満たしている。にもかかわらず、この文は非文法的である。したがって、この文の非文法性は(2)の条件によって説明することができない。

2.

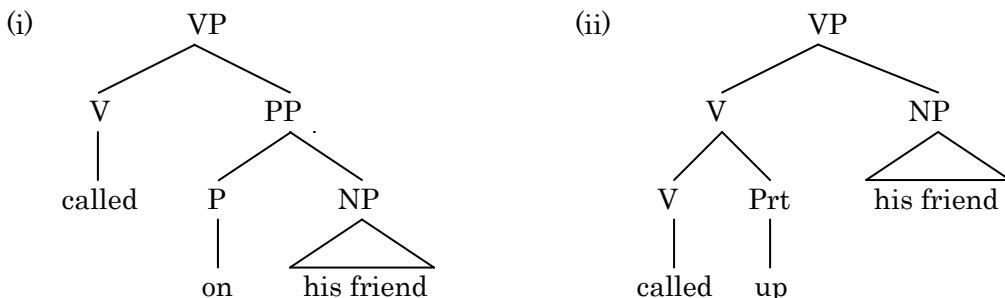
〔問題〕 以下の文に含まれる call on は前置詞付き動詞(prepositional verb)と呼ばれ、call up は句動詞(phrasal verb)と呼ばれる。句動詞において動詞に後続する要素は前置詞ではなく、副詞または不変化詞(particle)である。

- (1) a. John called on his friend.
b. John called up his friend.
- (2) a. It was on his friend that John called.
b. *It was up his friend that John called.
- (3) a. John called angrily on his friend.
b. *John called angrily up his friend.

〔解答〕 (2)では、1.3.2項で見た構成素テストの1つである移動が用いられており、分裂文の焦点の位置に移動することができるか否かがテストされている。(2a)のように、前置詞付き動詞における前置詞と目的語をまとめて移動することができるので、それらが構成素をなし、その範疇は PP であると考えられる。一方、(2b)のように、句動詞における不変化詞と目的語をまとめて移動することができないので、それらが構成素をなさないことが分かる。

(3a)では、前置詞付き動詞において動詞と前置詞の間に副詞を挿入することができるので、それらが構成素をなさないことが分かる。(3b)では、句動詞において動詞と不変化詞の間に副詞を挿入することができないので、それらが構成素、具体的には複合動詞(complex verb)を形成していると考えられる。

以上の議論から、前置詞付き動詞では前置詞と後続する目的語が構成素 PP を形成し、それが動詞の補部となっているのに対し、句動詞では動詞が不変化詞と複合動詞を形成し、それが目的語を補部としてとっていると分析される。



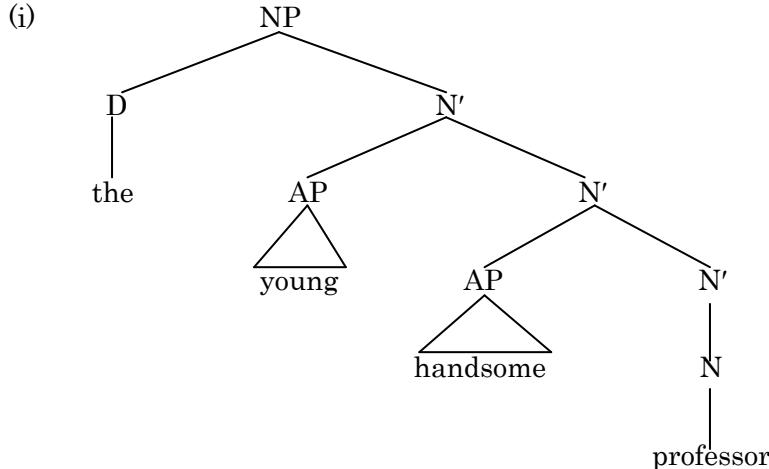
3.

【問題】 (46)において日本語の名詞前位の形容詞が N'に付加されていることを見たが、英語にも同様の分析が当てはまるであろうか。以下の例を用いて、英語の名詞前位の形容詞の構造的位置について論じ、NP the young handsome professor の統語構造を樹形図で表しなさい。その際、the [young] and [very handsome] professor のような等位接続が可能であるので、名詞前位の形容詞が一語であってもその範疇は AP であるとする。

- (1) a. The young handsome professor is taller than the old ugly one.
 b. The young handsome professor is taller than the old one.
 (one = handsome professor)
 c. This young handsome professor is taller than that one.
 (one = young handsome professor)

【解答】 (1)では、1.4 節で見た N'の代用形である one による置換のテストが用いられている。(1a)では、one は professor を置換しているので、the young handsome professor において the young handsome を除いた professor の部分が N'であることを示している。(1b)では、one は handsome professor を置換しているので、the young を除いた handsome professor の部分が N'であることを示している。(1c)では、one は young handsome professor を置換しているので、the を除いた young handsome professor の部分が N'であることを示している。

したがって、日本語の場合と同様に、英語の名詞前位の形容詞も N'に付加されており、the young handsome professor は N'が 3 度繰り返し出てくる構造を持つと考えられる。



●第2章

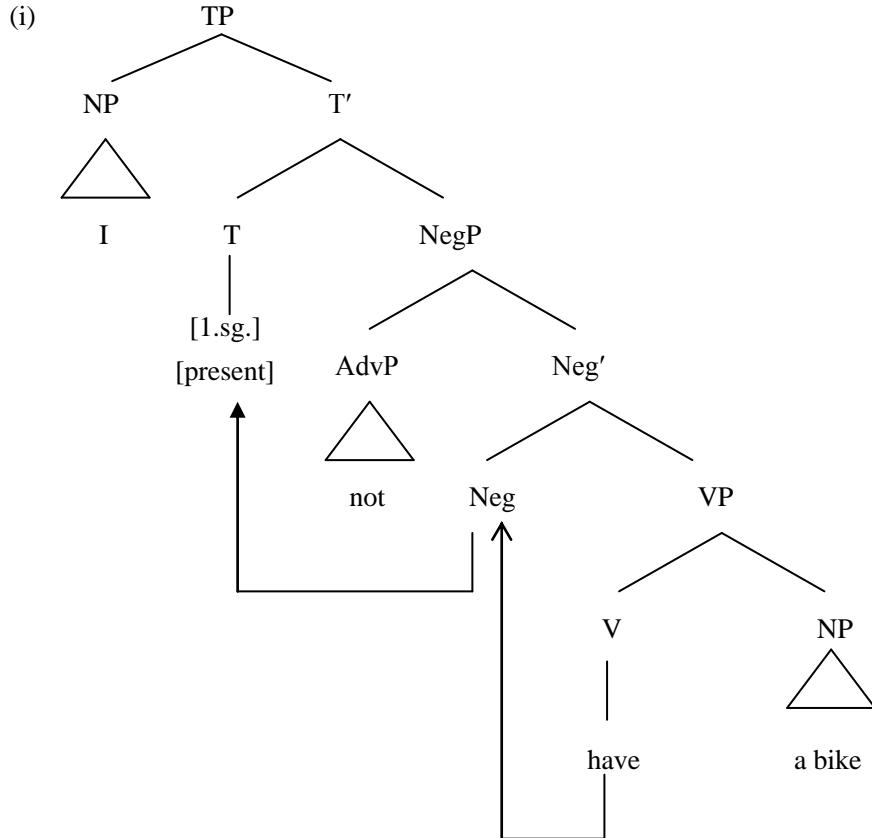
1.

【問題】 本動詞 have は、主にイギリス英語において（まれではあるが）助動詞と似た振る舞いをすることがある。

- (1) a. I have not a bike.
b. Have you a bike?

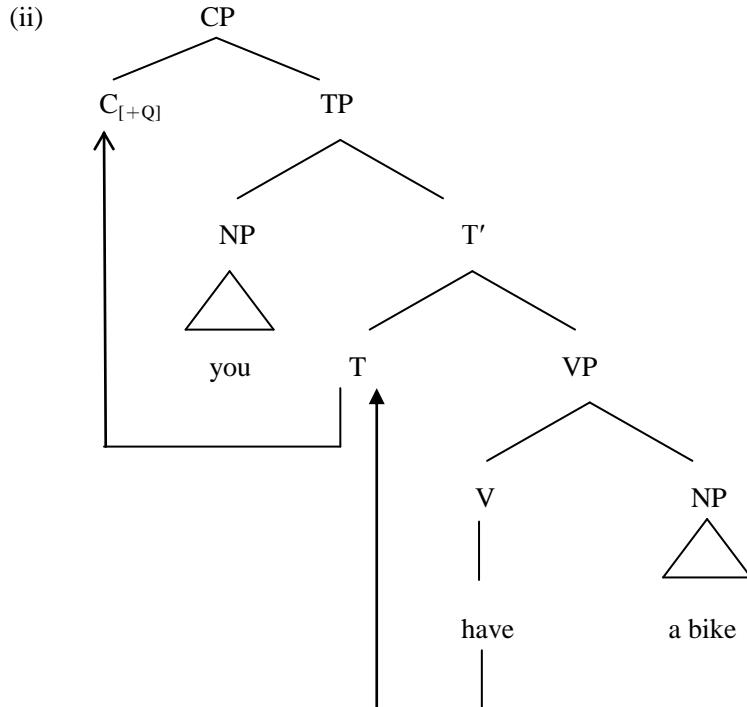
これらの否定文と疑問文の構造を樹形図によって示すとともに、その派生の仕組みを説明しなさい。

【解答】 (1a)の否定文では have が not の左側に現れていることから、have が T の位置を占めていることが分かる。そこで、イギリス英語の本動詞 have はその語彙的特性として、助動詞 have/be や連結詞 be と同じように主要部移動によって T に上昇することができると仮定しよう（第2章(20)を参照）。その構造と派生は下のように表される。



have は原形動詞として V に生成され、その後主要部移動によって T まで上昇し、動詞屈折接辞と一体化することで定形動詞となる。その際、主要部移動制約（第2章(19)を参照）により V から T まで一度に移動することはできず、連続循環的に移動しなければならないので、have は Neg を経由して T に到達する。主要部移動により残置接辞フィルター（第2章(10)を参照）を満たすことができるので do 挿入（第2章(27)を参照）は適用されず、(1a)の否定文が得られる。

また、(1b)の疑問文では本動詞 have が主語の左側に現れていることから、have が C の位置を占めていることが分かる。その構造と派生は(ii)のように表される。



yes-no 疑問文に現れる C は音声的に具現化されなければならないが（第2章(40)を参照）、上の(ii)では V から T へと主要部移動した have がさらに C へと主要部移動することでこの条件が満たされる。よって、ここでも do 挿入は適用されず、(1b)の疑問文が得られる。

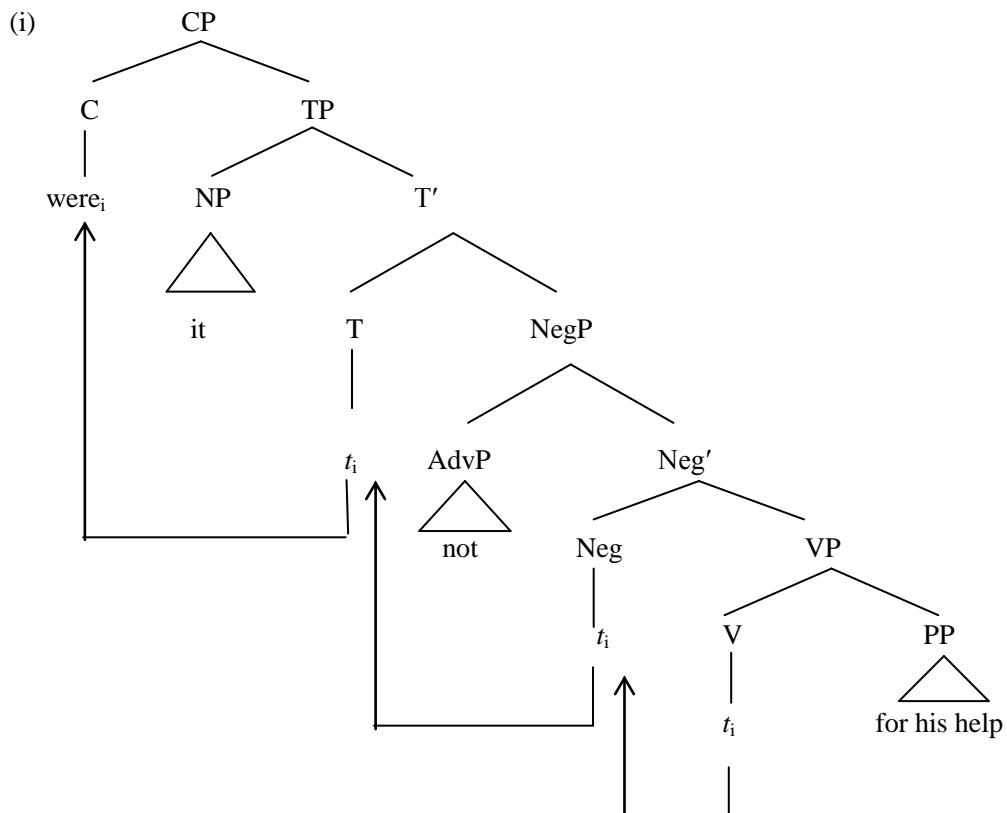
2.

【問題】 仮定法の if 節では、時として接続詞が省略され、代わりに were (あるいは had) が主語の前に置かれることがある。

- (1) a. If it were not for his help, I wouldn't do such a thing.
 b. Were it not for his help, I wouldn't do such a thing.

接続詞が省略された(1b)の構造を樹形図によって示すとともに、その派生の仕組みを説明しなさい。

【解答】 主語の前に were が置かれた(1b)が、yes-no 疑問文と同じ語順であることに注目する。この平行性を捉えるために、仮定法 if 節に含まれる補文標識 C は yes-no 疑問文の C_{[+Q]} と同様に音声的に具現化されなければならないと仮定しよう（第2章(40)を参照）。すると(1a, b)の対比を、前者では接続詞 if によって C が音声的に具現化されるのに対し、if が省略された後者では were が C まで連続循環的に主要部移動することによって C が具現化されている、と解釈することができる。(1b)の構造と派生は(i)のように示される。



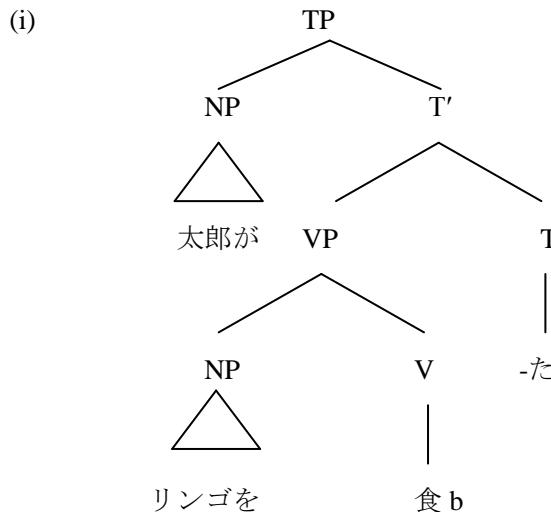
3.

【問題】 日本語では、小辞「も・さえ」が動詞に後続する場合、「動詞—小辞—する（した）」という形式をとる。

- (1) a. 太郎がリンゴを食べた.
b. 太郎がリンゴを食べ{も・さえ}した.

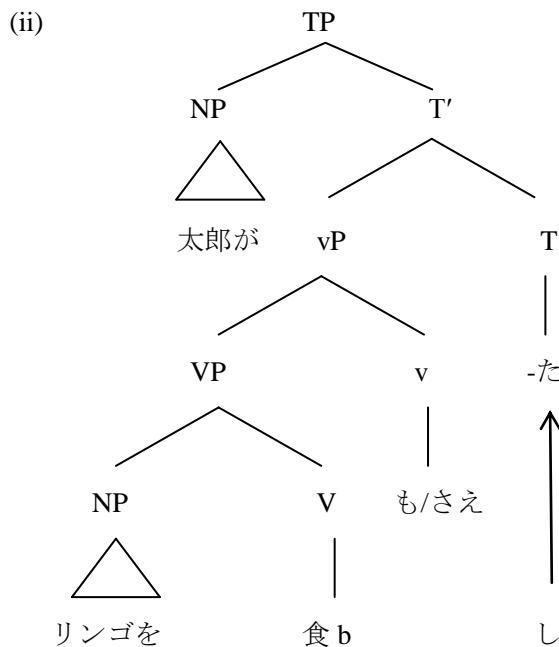
小辞「も・さえ」が現れている(1b)の構造を樹形図によって示すとともに、その派生の仕組みを説明しなさい。

【解答】 まず、「も・さえ」が生じていない(1a)の構造は(i)のように表される。



ここでは動詞語幹「食 b」と過去時制の屈折接辞「た」が隣接しているので、そのまま発音して（あるいはVがTに主要部移動して）両者を「食べた」と一体化させることができる。

それに対し、(1b)では「も・さえ」が動詞語幹と屈折接辞の間に介在することで、両者の隣接性が妨げられている。「も・さえ」の具体的な統語上の位置についてはさまざまな分析があり得るであろうが、ここでは第3章で導入されるvP構造を先取りして、「も・さえ」が軽動詞vの位置を占めると仮定しよう。そうすると、(1b)の構造は(ii)のように表される。



この構造を直接発音することによっても、あるいはVを（連続循環的に）主要部移動させることによっても、動詞複合体「食べた」を形成することはできない。そこで、ダミー助動詞「する」の変異形「し」をTに直接挿入することによって動詞複合体「した」を派生させ、残置接辞フィルター（第2章(10)を参照）を満たしている。これは、英語におけるdo挿入（第2章(27)を参照）と同様の操作である。

●第3章

1.

【問題】 *plan, cease, expect*などの述語が、繰り上げ述語、コントロール述語、ECM述語(ECM構文を取る動詞)のいずれであるか、本文で紹介した虚辞や慣用句の切れ端の分布に基づいて調べなさい。

【解答】 虚辞 *it* や *there*、および慣用句の切れ端は、繰り上げ述語の主語として現れることができるが、コントロール述語の主語として現れることがない(第3章(31), (32)を参照)。まず、*cease/plan* を含む例文を見てみると、*cease* は主語として虚辞や慣用句の切れ端を許すが、*plan* は許さない。

- (i) a. It ceases/*plans to be assumed that he told a lie.
- b. There ceases/*plans to be a difference in my working clothes and my casual ones.
- (ii) Whenever they meet ...
 - a. all hell (never) ceases/*plans to break loose.
 - b. the fur (never) ceases/*plans to fly.
 - c. the cat (never) ceases/*plans to get his tongue.
 - d. the shit (never) ceases/*plans to hit the fan

コントロール述語は外項をとるので、項として機能しない虚辞や慣用句の切れ端はその主語となることができない。一方、繰り上げ述語は外項をとらず、不定詞節の主語が主節の主語位置に移動するので、不定詞節の述語が虚辞や慣用句の切れ端と共に起可能であれば、これらの要素が繰り上げ述語の主語となることができる。したがって、(i), (ii)の事実より、*cease* は繰り上げ述語であり、*plan* はコントロール述語であると結論付けられる。

次に、虚辞 *there* は ECM 構文に現れることがあるが、目的語コントロール構文に現れることがない(第3章(37)を参照)。*expect* を含む例文を見てみると、後続する位置に虚辞 *there* が現れることができる。

- (iii) I expected there to be many survivors in the accident. (Radford 1988: 320)

また、*expect* に後続する位置に慣用句の切れ端が現れることができるが、目的語コントロール述語である *persuade* に後続する位置に現れることがない。以下の *persuade* を含む例では慣用句の解釈は許されず、文字通りの解釈のみが許される。

- (iv) a. They expect/persuade all hell to break loose.
- b. They expect/persuade the fur to fly.
- c. They expect/persuade the cat to get his tongue.
- d. They expect/persuade the shit to hit the fan.

目的語コントロール述語は内項として NP(および不定詞節)をとるので、後続する位置に項として機能しない虚辞や慣用句の切れ端が現れることがない。一方、ECM述語は内項として不定詞節のみをとり、後続する NP は不定詞節の内部に併合されるので、不定詞節の述語が虚辞や慣用句の切れ端と共に起可能であれば、これらの要素が ECM述語に後続する位置に現れることがある。(ECM構文の主語が不定詞節の内部から主節へ移動しているとする分析については、3.4.2項を参照。) したがって、(iii), (iv)の事実より、*expect* は ECM

述語であると結論付けられる。一方、Bresnan (1979)は、(v)のような例における *expect* は要求や義務の意味を表し、後続する位置に有生の NP のみを許す（虚辞や慣用句の切れ端を許さない）目的語コントロール述語として振る舞うことを観察している。

- (v) As long as I'm boss, I will expect everybody to have a share in the office work.

(Bresnan 1979: 163)

参考文献

- Bresnan, Joan (1979) *Theory of Complementation in English Syntax*, New York: Garland.
 Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge: Cambridge University Press.

2.

【問題】 英語の(1)のような ECM 構文に対応する日本語の文には(2)のような表現が考えられる。(2)のような文の構造と派生について、英語と同じであるのか、参考文献も利用して検証しなさい。

- (1) I believe John to be a genius.
 (2) 私はジョンを天才だと信じている。

【解答】 3.4.2項で述べたように、(1)のような英語のECM構文では、不定詞節内に併合された主語が主節へと移動する。これに対して、Takano (2003)によれば、(2)のような対応する日本語の構文は、英語のECM構文ではなく、(i)のような構文と同様の構造と派生を持つ。(i)におけるof Johnは先触れの目的語(object of anticipation)と伝統的に呼ばれてきたものであり、(2)のような日本語の構文には、先触れの目的語が含まれるという予期的分析(prolepsis analysis)を提案している。

- (i) I believe of John that he is a genius.

この分析を支持する証拠として、数量詞の作用域に関する事実が挙げられる。

- (ii) a. 警察は三人の男が犯人だと断定した。

- b. 警察は三人の男を犯人だと断定した.

(Takano 2003: 802)

(iia)では、主格の NP 「三人の男」が主節動詞「断定する」よりも広い作用域の読みと狭い作用域の読みを持つ。この場合の広い作用域の読みは、三人の男の存在が話者にとって真であるという読みであり、狭い作用域の読みは、三人の男の存在が主節主語である警察の心のうちでは真であるという読みである。英語の ECM 構文(iii)では、two assumptions が主節動詞 proved よりも広い作用域と狭い作用域の 2 つの読みを持つので、日本語の(iia)は英語の ECM 構文と同様の振る舞いを示す。この事実は、「三人の男」が従属節に併合された後、主節に移動すると仮定することにより説明される。

- (iii) John proved two assumptions to be false.

(Stowell 1991: 201)

これに対して、(iib)では、対格の NP 「三人の男」は主節動詞「断定する」よりも狭い作用域の読みを持たず、広い作用域の読みしか持たない。このことは、「三人の男」が従属節から主節へ移動したという分析によっては捉えられず、「三人の男」は主節に併合されることを示している。Takano は「ジョンはドイツ語を話せる」のような主格目的語構文と関連付

け、(2)に対して概略以下のような構造を与えていた。(iv)では、第2章の議論に従って、本動詞「信じる」がTに移動すると仮定している。

(iv) [TP 私は [VP [VP ジョン_iを [CP [TP pro_i 天才だ]と]]]] 信じている]

「信じる」の内項として、主節のVP指定部には「ジョン」、Vの補部には従属節のCP(補文標識「と」を主要部とする)が生成され、従属節の主語として「ジョン」と同一の指示対象を表す空の代名詞proが生じている。これは第5章で提示される目的語コントロール構文の構造とほぼ同じであり、「ジョン」が主節に併合されるという点で、英語のECM構文の主語とは統語的位置付けが異なる。

参考文献

Stowell, Timothy (1991) "Small Clause Restructuring," in Robert Freiden (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, Cambridge, MA: MIT Press, 182-218.

Takano, Yuji (2003) "Nominative Objects in Japanese Complex Predicate Constructions: A Prolepsis Analysis," *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 779-834.

3.

【問題】 (1)の受動文には「ドアが閉められた」という意味だけでなく、「ドアが閉められていた」という意味もある。それに対して、(2)の受動文には「ドアが閉められていた」という意味はない。

(1) The door was closed.

(2) The door was closed by Mary.

なぜこのような違いが出てくるのか、またその違いは両者のどのような派生の違いに関係しているかを調べてみなさい。

【解答】 英語の受動文には、形容詞的受動文(adjectival passive)と動詞的受動文(verbal passive)の2種類がある(両者を区別する診断法については、Wasow (1977)を参照)。(1)の受動文は、「ドアが閉まっていた」という状態の読みと、「ドアが閉められた」という出来事の読みを持つ。状態の読みは形容詞的受動文に対応し、出来事の読みは動詞的受動文に対応する。一方、by句を伴う(2)の受動文は動詞的受動文であり、「ドアが閉められた」という出来事の読みしか持たない。

動詞的受動文の派生は3.5.1項で述べた通りであるが、形容詞的受動文は動詞的受動文とは異なり、次のような過程を経て語彙部門(lexicon)で形成される(Williams 1981)。

- (i) a. 動詞を形容詞に変化させる
- b. 項構造から外項のθ役が取り除かれる
- c. 内項が外項化され、主語位置(APの指定部)に併合される

形容詞的受動文としての(1)は次のように派生される。(この場合のbeは補部としてAPをとるので、VoiではなくVに生成される連結詞であると仮定する。)

(ii) [TP the door_i [T [T was_j] [VP t_j [AP t_i closed]]]]]

the doorは形容詞化されたclosedの指定部に併合され、その位置でθ役を付与される。そ

して、Tとの一致操作により主格の値を与えられ、TのEPP素性を満たすためにTPの指定部へ移動する。

3.5.1 項で述べたように、受動文に現れる by 句の目的語は、外項に付与されるはずのθ役を担うので、by 句を伴う受動文は外項のθ役を保持している動詞的受動文である。したがって、(2)は出来事の読みしか持たないという事実が説明される。これに対して、(1)においては、外項に付与されるはずのθ役が取り除かることで、この文は形容詞的受動文として状態の読みを持つ。一方、それが保持されて-en に取り込まれると、動詞的受動文として出来事の読みを持つことになる。

参考文献

- Wasow, Thomas (1977) “Transformations and the Lexicon,” in *Formal Syntax*, Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.), *Formal Syntax*, New Yor: Academic Press, 327-360.
Williams, Edwin (1981) “Argument Structure and Morphology,” *The Linguistic Review* 1: 81-114.

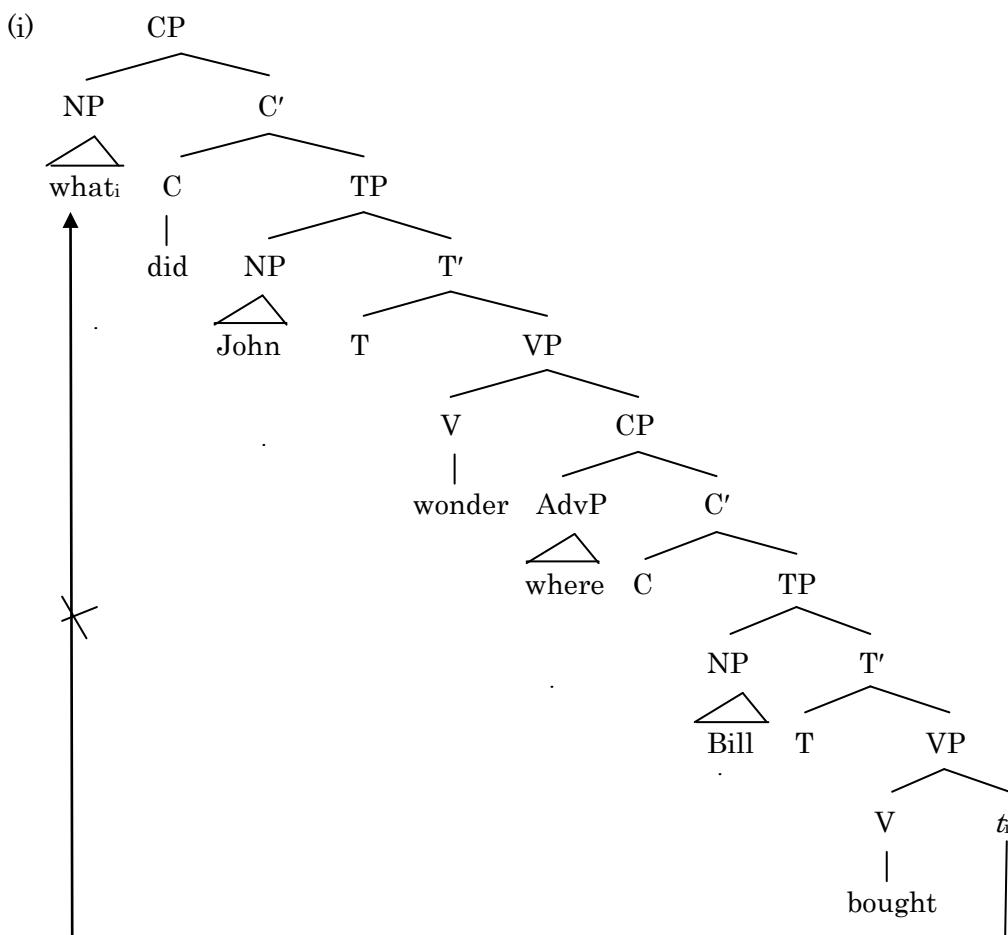
●第4章

1. 【問題】次の各文の非文法性について、適宜構造を示して、関連する規則や原理等に言及しながら説明せよ。

- (1) *What did John wonder where Bill bought?
(cf. John wondered where Bill bought those cakes.)
- (2) *I could not understand this book, why, the professor recommended.
(cf. I could not understand why, this book, the professor recommended.)
- (3) *Whose did John take picture?
(cf. Whose picture did John take?)
- (4) *Which book did who read?
(cf. Who read which book?)
- (5) *Which picture did John take that picture?
(cf. Which picture did John take?)
- (6) *John wondered which book would he recommend.
(cf. John thought no book would he recommend.)

〔解答〕

(1)

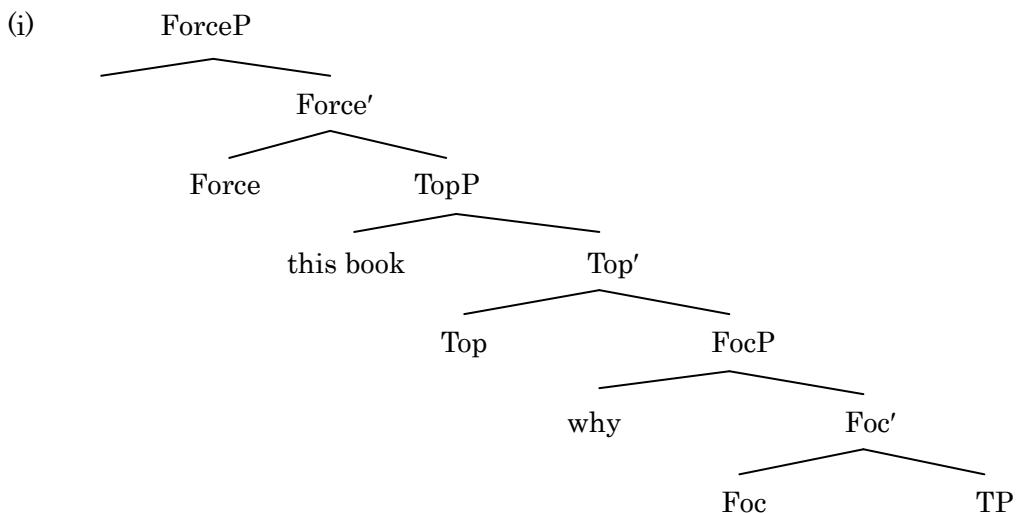


[CP What_i [C did] [TP John wonder [CP where [TP Bill bought t_i]]]]?

(1)においては、CPの指定部に **where** が位置する埋め込み節内から **what** を抜き出したために、非文法性が生じている。埋め込み節の CP 指定部が **where** によって占められているため、**what** はそこを経由せずに主節の CP 指定部まで移動しなければならないが、そのような移動はフェイズ不可侵条件(PIC; 第4章(35))の違反となる。これは、主節の C が持つ [uWh] が、埋め込み節の C の領域内にある **what** と一致操作を結ぶことができず、**what** の移動が阻止されるからである。

(2)

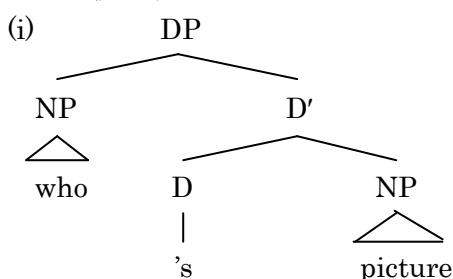
(2)においては、埋め込み節で話題 (this book) が wh 句 (why) に先行しており、非文法的となっている。分離 CP 構造 (第4章(69)) に従うと、この文における話題は TopP の指定部にあり、wh 句は FocP の指定部にあることになる。



しかし、埋め込み節において wh 句は FocP の指定部に留まることができないため、(2) は非文法的となる (第4章(72a))。埋め込み節において wh 句が FocP の指定部に留まることができないことは、第4章(77b)の例からも支持される。

(3)

(3)においては、**whose** が **picture** を随伴していないため非文法的となっている。この事実は、第1章で言及した DP 仮説を採用し、**whose picture** が(i) (第4章(63)) のような内部構造を持つと仮定すれば説明される。



(i)では **whose** を **who** と **'s** に分解している点が重要であり、**who** と **'s** が構成素をなしていないので **whose** のみを移動することができない。(ちなみに、**who** だけを移動すると、接辞である **'s** が付着する相手がなく取り残されてしまうので、非文法的となる。)一方、**whose**

picture は DP という構成素をなしているので、移動することができる。このように、(3)において随伴が義務的となる理由は、構成素のみが移動の対象となるという一般的制約に還元される。

(4)

英語の多重 wh 疑問文においては、文頭に現れる wh 句は必ず 1 つであり、残りの wh 句は元位置に留まる。(4)において who は which book の元位置を c 統御しており、which book よりも C に対して構造上近い位置にある。このため、who を越える which book の移動是不可能である。

(i) [CP Which book_i [c did] [TP who buy t]] (cf. 第4章(82))

これは、C の持つ[uWh]が最も近い位置にある wh 句と一致操作を結び、その wh 句が CP の指定部に移動しなければならないからである。

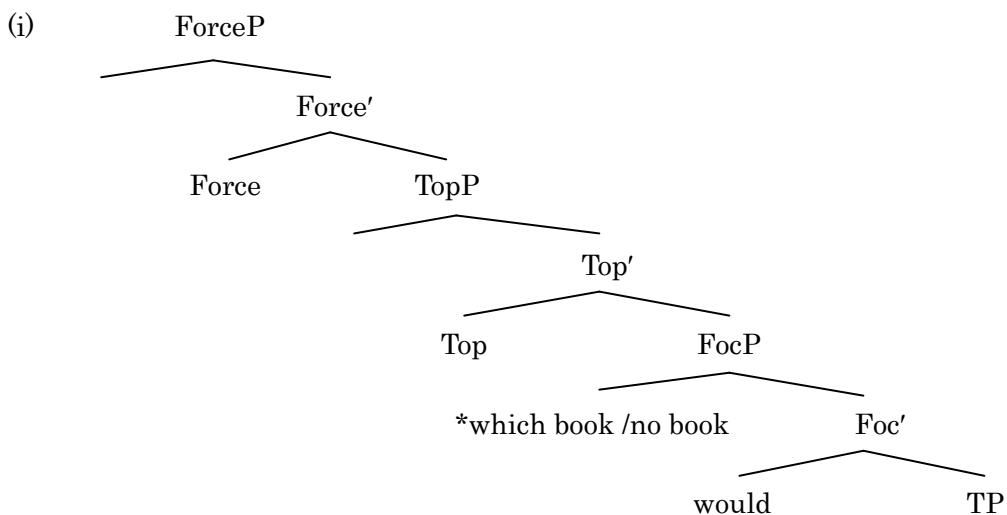
(5)

(5)においては、which picture に対応する位置に that picture が現れており、空の量化が起こっているため、非文法的となっている。空の量化の禁止は、wh 句が対応する位置に生成され、その後文頭に移動したとすれば説明される。さらに、コピー理論に従えば、wh 移動の元位置にはコピーが残されるので、それ以外の要素が現れることはできない。

(i) [Which picture]_i did John take [which picture]_i?

(6)

(6)においては、wh 句が埋め込み節の先頭に現れ、加えて wh 句と主語の間に助動詞 would が現れており、非文法的となっている。分離 CP 仮説に従えば、埋め込み節において wh 句は FocP ではなく ForceP の指定部に移動しなければならない。しかし、(6)では主語・助動詞倒置が起こっており、wh 句が FocP の指定部にあることになるので、非文法的となる。これに対して、焦点は FocP の指定部に現れるので、(6)の下に示した例は文法的となる。



また、(6)において wh 句の後で主語・助動詞倒置が起こっていなければ、wh 句が ForceP の指定部にあると分析され（Force に助動詞が移動することはできない）文法的となる。埋め込み節において wh 句が ForceP の指定部まで移動することについては、第4章(78)を参照。

2.

〔問題〕 次の各文の下線で示した要素の解釈について、適宜構造を示して、関連する規則や原理等に言及しながら説明せよ。

- (1) Which picture of himself does John think Bill said that Taro took?
- (2) Which pen did John waste without using ?
- (3) What do you think that John insist that Bill should show all? (西アルスター英語)
- (4) どこで何を太郎は買ったの。

〔解答〕

(1)

(1)において、himself は John も Bill も Taro も先行詞とすることができます。これは、wh 句が連続循環的に移動し、併合された位置と全ての着地点にコピーが残されると仮定すれば、束縛原理 A (第4章(6)) により説明することができる。以下のように、which picture of himself は took の目的語位置に併合され、全ての CP 指定部を経由して連続循環的に移動する。

(i) [which picture of himself]_4 does [TP₃ John think [CP [which picture of himself]_3 [TP₂ Bill said [CP [which picture of himself]_2 that [TP₁ Taro took [which picture of himself]_1]]]]]]? 1 のコピー内にある himself はそれを含む最小の TP(TP1)内で Taro により束縛されており、2 のコピー内にある himself はそれを支配する最小の TP(TP2)内で Bill により束縛されており、3 のコピー内にある himself はそれを支配する最小の TP(TP3)内で John により束縛されている。したがって、それぞれの場合に束縛原理 A が満たされるので、himself は Taro, Bill, John のいずれも先行詞とすることができます。

(2)

(2)の下線部の空所は、wh 移動によって残された元位置の空所に依存している寄生空所であり、その先行詞は which pen である。ただし、which pen の元位置 (waste の目的語位置) は using の目的語位置を c 統御しない (反 c 統御条件) ので、寄生空所が which pen を先行詞とすることを保証する仕組みが必要となる。

これは、Nunes (2001, 2004) が提案した側方移動を用いることにより、次のように説明される。まず、which pen を含む構造と waste がそれぞれ独立して用意される。

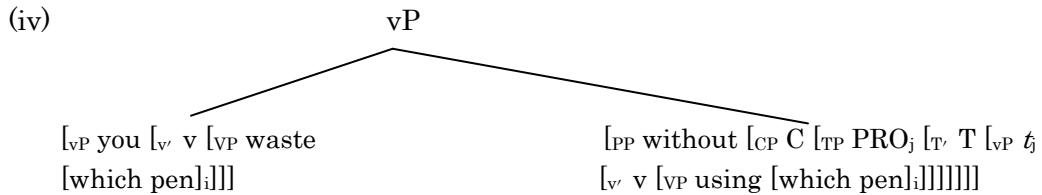
- (i) a. K = [CP C [TP PRO_j [T_i T [v_P t_j [v_v v [VP using [which pen]_i]]]]]]]
- b. L = waste

K の内部にある [which pen]_i に側方移動が適用され、waste の補部に併合される。

- (ii) a. K = [CP C [TP PRO_j [T_i T [v_P t_j [v_v v [VP using [which pen]_i]]]]]]]
- b. M = [VP waste [which pen]_i]

その後、K と M は独立して派生を続け、K が P, M が Q まで拡張された段階で、P が Q に付加される。

- (iii) a. P = [PP without [CP C [TP PRO_j [T_i T [v_P t_j [v_v v [VP using [which pen]_i]]]]]]]
- b. Q = [v_P you [v_v v [VP waste [which pen]_i]]]



(iv)ではQのwhich penがPのwhich penをc統御しないので、反c統御条件が満たされない。したがって、この時点ではQのwhich penとPのwhich penの間に連鎖は形成されない。(iv)のvPがCPまで拡張され、which penがCPの指定部に移動した段階の構造が(v)である。

(v) [CP [which pen]_i did [TP you [VP [v waste [which pen]_i] [PP without PRO using [which pen]_i]]]]

(v)では2つの連鎖が形成される。1つは文頭のwhich penとQのwhich penからなる連鎖であり、もう1つは文頭のwhich penとPのwhich penからなる連鎖である。この時点で寄生空所の先行詞が文頭のwhich penであることが保証される。最後に、(v)においてCP指定部以外のwhich paperを削除することにより(2)が派生される。

(3)

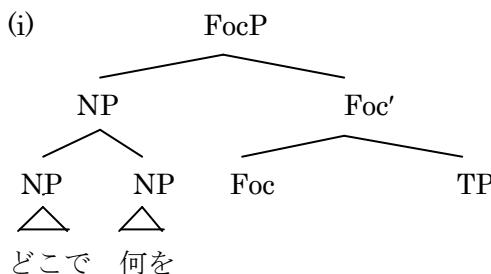
McCloskey (2000: 58ff.)によると、アイルランドで話されている西アルスター英語のwh疑問文では、数量詞allが修飾するwh句と隣接して現れるだけでなく、(3)のようにwh句から遊離することが可能である。(3)は、wh句が移動する際にallが元位置に残置された結果であり、wh移動の証拠の1つであると見なされる。

(i) What_i do you think that John insist that Bill should show what_i all?

また、第4章(25)で見たように、西アルスター英語のwh疑問文では、補文の先頭にもwh句を修飾するallが現れるので、wh移動がCPの指定部を経由して連続循環的に適用されることの証拠となる。

(4)

日本語においては複数のwh句が焦点化されることが可能であり、(4)のFocPの構造は以下のようになる。



(4)のような多重wh疑問文に対する最も自然な答えは、「書店で本を買い、花屋で花を買った」のように、全てのwh句の値をまとめてリストとして提示するもので、そのような答えを要求する解釈をペアリストの解釈(pair-list interpretation)と呼ぶ。ペアリストの解釈においては、全てのwh句がFocと一致操作を結び、FocPの指定部に移動して構成素をなすと考えられる。

3.

【問題】 次の各文の解釈の違いについて、適宜構造を示して、関連する規則や原理等に言及しながら説明せよ。

- a. 太郎は[花子がどの写真を撮ったか]言いました。
 - b. 太郎は[花子がどの写真を撮ったと]言いましたか。
 - c. 太郎は[花子がどの写真を撮ったか]言いましたか。

〔解答〕

(1)-(3)はいずれも wh 句「どの写真を」を含んでいるが、文全体として(1)は平叙文、(2)は wh 疑問文、(3)は yes-no 疑問文である。

この違いは wh 句の作用域の違いに起因する。wh 句は C と一致操作を結ぶことにより、その作用域が決定される。日本語においては、C の位置に「か」が現れ wh 句と一致操作を結ぶので、「か」を含む節が wh 句の作用域となる。(1)においては「か」が埋め込み節に現れ、wh 句の作用域が埋め込み節となるので、全体として肯定文の解釈が与えられる。(2)においては「か」が主節に現れているので、wh 句の作用域が主節となり、全体として wh 疑問文の解釈が与えられる。ただし、(3)のように埋め込み節と主節の両方に「か」が現れる場合には、島の効果が現れる。つまり、wh 句は構造上最も近い「か」と一致操作を結ぶので、(3)においては埋め込み節の「か」の存在によって、「どの写真を」は主節の「か」と一致操作を結ぶことができない。したがって、「どの写真」の作用域は埋め込み節となり、(3)の疑問文に対する答えは、「どの写真」の内容ではなく Yes か No になる。以下の構造では便宜上 v とその投射は省略し、第 2 章の議論に従って、日本語の本動詞が T まで移動すると仮定している。

(i) [CP [TP 太郎は [VP [CP [TP 花子が [VP どの写真を] 撮った] か]] 言いました] か]

●第5章

1.

【問題】 束縛理論を用いて以下の文法性の対比を説明しなさい。

- (1) a. John_i believes himself_i to be smart.
b. *John_i believes him_i to be smart.
- (2) a. Sam_i seems to himself_i to like Mary.
b. *He_i seems to Sam_i to be expected to win.

【解答】

(1)はECM構文の例であり、以下の構造を持つ（第3章(40)を参照）。

- (i) [TP John_i T [VP [v believes_j] [VP him_i/himself_i [V_j t_j [TP t_i to [VP t_i v [VP be smart]]]]]]]

不定詞節の主語 him/himself は不定詞節内では格素性に値が与えられず、主節 V の EPP 素性を満たすために VP の指定部へ繰り上がり、v との一致操作の下で対格の値が与えられる。himself は最小の TP (主節の TP) 内で John によって束縛されるため、束縛原理 A (第5章(8)) を満たし文法的である。一方、him は最小の TP (主節の TP) 内で John に束縛されるため、束縛原理 B (第5章(13)) に違反し非文法的となる。5.3.1項で紹介した束縛の移動分析を用いても、同様に説明することができる。(i)において、主節の VP 指定部まで移動した[NP [John] self]の複合体から John が VP の指定部に移動し、主語としてのθ役を付与される。さらに、John は T の EPP 素性を満たすために TP の指定部へ移動する。(1a)のように併合と移動のみを用いた派生の方が、(1b)のように代名詞類を用いる派生よりも経済的であるため、派生の経済性により(1a)のみが文法的となる（第5章(24)の議論を参照）。

(2)は繰り上げ構文の例であり、概略以下の構造を持つ（第3章(35)を参照）。

- (i) a. [TP Sam_i seems [PP to himself_i] [TP t_i to [VP t_i like Mary]]]
b. *[TP he_i seems [PP to Sam_i] [TP t_i to be expected [TP t_i to [VP t_i win]]]]]

主節主語である Sam と he は主節 T の EPP 素性を満たすために、不定詞節の TP 指定部を経由して主節の TP 指定部に移動する。(ia)の himself は最小の TP (主節の TP) 内で Sam に束縛されるため、束縛原理 A を満たし文法的である。一方、(ib)の Sam は he に束縛されるため、束縛原理 C に違反し非文法的となる。

2.

【問題】 以下の例文には、動詞句削除、先行詞内削除、空所化、擬似空所化、間接疑問縮約のいずれかが関与している。それぞれの例文について、どの現象が関与しているか、および省略されている部分と先行詞を答えなさい。

- (1) Harry bought something, but I don't know what.
- (2) Jack knows who she invited, but James doesn't.
- (3) Lucy visited every town Alice did.
- (4) Lily gave you a book and Ben a chocolate.
- (5) Emily will eat kale on Tuesday, but she won't asparagus.

〔解答〕

[]が省略部分、下線が先行詞を表す。

- (1) 間接疑問縮約

Harry bought something, but I don't know what [he bought].

- (2) 動詞句削除

Jack knows who she invited, but James doesn't [know who she invited].

- (3) 先行詞内削除

Lucy visited every town Alice did [visit (every town)]

(cf. 第5章(36))

- (4) 空所化

Lily gave you a book and Ben [gave you] a chocolate.

- (5) 擬似空所化

Emily will eat kale on Tuesday, but she won't [eat] asparagus.